三好潤也氏の学位論文審査の要旨

論文題目

妊娠早期胞状奇胎の臨床的特徴ならびに流産後の管理指針に関する検討

Early-stage hydatidiform mole: clinical manifestations and the managements for the early diagnosis of following persistent trophoblastic disease

胞状奇胎は受精過程の異常により発生し、栄養膜細胞の異常増殖と間質の浮腫を特徴とする疾患で、絨毛癌などの続発症を発症する危険性がある。最近、胞状奇胎がより早期に発見されるようになったのに伴い、臨床医は従来とは異なる判断基準によって胞状奇胎に対峙する必要が生じてきた。妊娠早期胞状奇胎の臨床像を把握し、血中ヒト絨毛性ゴナドトロピン(hCG)値の推移を指標として胞状奇胎後の存続絨毛症を早期発見するための管理指針について検討することを目的とし、以下の研究が行われた。

病理組織学的検討によって初めて胞状奇胎と診断された全胞状奇胎 32 例(妊娠早期胞状奇胎群)について臨床像(年齢、妊娠週数、初回月経開始までの期間など)と血中 hCG 値の推移を早期流産群と比較しながら解析した。妊娠早期胞状奇胎の画像所見はこれまでに知られていた多嚢胞状とは異なっており、流産との鑑別は容易ではなかった。子宮内容除去術を行った時点での流産群の血中 hCG 値は 31,205mIU/ml に対し、妊娠早期胞状奇胎群は 110,804mIU/ml と有意に高値であった($P<0.001$)。妊娠早期胞状奇胎群 32 例のうち、奇胎娩出後に順調な経過を辿り血中 hCG 値が陰性化した胞状奇胎(経過順調群)は 24 例、血中 hCG 値が陰性化せず存続絨毛症を続発した胞状奇胎(存続絨毛症群)は 8 例であった。手術時の経過順調群の血中hCG値は流産群に比較し有意に高値であった($P<0.01$)。血中hCG値がカットオフ値を下回るまでの期間は経過順調群が 74 日、流産群が 60 日($P=0.08$)であった。妊娠早期胞状奇胎からも存続絨毛症が発生する危険性があるが、子宮内容除去術の術後 4 週間目の血中 hCG 値が 25mIU/ml 以下に低下し、術後 3 回目の月経後に血中 hCG 値が陰性化することは存続絨毛症を否定する上で有意義な所見であり、管理指針に値すると考えられた。

質疑においては奇胎細胞残存のメカニズム、絨毛癌の発生の機序と鑑別、hCG値と胞状奇胎の種類との関連など多方面にわたる議論がなされ、申請者からはおおむね的確な答えがなされた。

本研究は妊娠早期胞状奇胎の臨床像について新たな情報をもたらし、また血中 hCG 値の測定の意義を存続絨毛症早期発見の上から明らかにして管理指針を提案した研究として重要であり、学位にふさわしいと判断される。

審査委員長　小児科学分野　　遠藤文夫

審 査 結 果

学位申請者名: 三好 潤也

分野名またはコース名: 婦人科 学

学位論文題名:妊娠早期胞状奇胎の臨床的特徴ならびに流産後の管理指針に関する検討
(Early-stage hydatidiform mole: clinical manifestations and the managements for the early diagnosis of following persistent trophoblastic disease)

指導: 片渕 秀隆 教授

判定結果 :

可 不可

不可の場合 :本学位論文名での再審査

可 不可

平成24年 2月13日

審査委員長 小児科学担当教授 遠藤文夫

審査委員 泌尿器病態学担当教授 江藤正俊

審査委員 分子病理学担当教授 山本哲郎

審査委員 小児科学担当講師 中村公俊